

文化富實を進高せしめたるは、殿様の恵に非ざる無し、是れ今日政府のお味方を爲したる恩賞として一年半歳地方に知事たる者と、同日にして談す可きに非ず、今に至り地方の人民が殿様の遺徳を景慕して忘れざる亦故なきに非ざるなり、而して其景慕の最も深きは最も永く一地を移轉せざりし殿様家に在り、筑前に於ける黒田家の如きは慥に其一なるを見る、

黒田家筑前を領して福岡に鎮せしより、繼々承々して此州を治め、明治四年の封土奉還に至るまで、三世紀間一日に異ならず、是を以て其恩徳の人心に根ざせるも亦深く且つ大なるものあり、従ひて此殿様家とお國との情誼は不就不離の妙味あり、わが此行會々黒田侯爵の下縣に際したれば、目のあたり縣人送迎の状を睹る、侯爵過る所の市町村父老は羽織袴を着し子弟は學校のユニフォームを穿ち、群を爲し隊を爲し而も政事家の送迎に幟を樹て旗を擎け、村社の祭禮然たるが如くならず、恭敬の極謹慎の至りは謂ふ所の蹶踏如たり與々如たるものあり、或地方の如きは道路に盛砂し、家々の子女は皆闕内に下拜し、父老の如き往々にして喜極まりて流涕する者あるを見る、而して一片侯爵の賞辭を得、一回侯爵の宴席に侍すれば、郷黨の譽と爲し、子孫の榮と爲す現に新聞紙は社會の耳目となり、之が操觚の士は多少今世の教育を受け、今世の思想を有する者なる可し、而して侯爵の動履を報するを見れば恰も至尊の行幸を記し奉るに似たるものあり、試に縣下新聞の一節を擧げん

侯爵には御下縣の目的を達せらるゝのみならず今は御希望の程も先づ好結果を奏したりければ始終満足に思召され心豊かに御歸京遊ばさるゝこといなり………  
御歸京の途に就かせられぬ

若し縣下の二三新聞同時に筆を揃え悉く侯爵の記事を以て紙面を填充するあらば、忽ち「御」といふ活字の拂底を告ぐるの急あらん。抑々新聞記者をして斯かる筆法に出でしむる、固より記者の衷心より出でたらんも間接には縣下の人心が之に非ざれば満足せざるの影響も亦尠なしとせじ、單だ此一事以て殿様——お國の關係の如何に深且つ大なるかを察するに餘りあらん。

お國の以て殿様家を景慕するや其れ斯くの如し、而して殿様も亦今に至るまで始終

お國の爲に其心力を竭盡することを愛まず、水旱には其災民を救ひ、軍旅には其遺孤を撫で、教育には其奨励を極む、現に縣下第一の中學修猷館の如き、亦實に黒田家の捐資に成れり、而して今の侯爵長成君夙に賢才の譽あり、祖宗の遺志を繼ぎて、亦心を舊封に傾く、近比年縣下政争の餘影社會公同の事業にも、動もすれば反目相闘ぐの状あるを慨し協同一致して教育及殖産工業の進善に勉む可きことを奨励す、縣下の筑前協會及自由黨其他の中立派等翕然起ちて之れに應じ、由來の感情行掛りを脱却し一朝にして『筑前俱樂部』を創設せり、われ本月三日を以て之れが發會式を博多の公園集成館に擧ぐるに臨む、雍々たる和氣一堂を繞り、南風の愠を解くが如きものあり、滿場一致以て侯爵の會長たらんを求むれば、侯爵も亦之を欣諾し、敢て其勞を辭せず、是れ時運の歸向にも由る可しと雖も黒田家の誠精人心に入るの深さに非ざる以上は何ぞ俄に此くの如きに至らんや。

## ◎筑前俱樂部

慶應元年の一蹶に、善類一時地を拂ひて盡き、明治十年の再蹶に、志士大半九泉に入

る、此遺憾何の日にか其れ消散せんや必らずや、慷慨悲憤の士、家を棄て身を忘れて其後を繼ぐ者あらん、玄洋社の興る、筑前協會の起つ、是れにこれ因せずはあらず、明治十三年箱田六輔が國會開設の請願書を懷にして郷關を出づるや閩郷の壯士盛に訣別の宴を張りて之を送る、珂那川は宛として易水の感あり、其一たび闕下に伏し、太政官の支關に書記官と受否を争ふに當りては、天下の志士皆領を延べて筑前人士の誠精氣魄を欽仰せざる無し、而も時運の未だ會せざるあり、事は志と違ひ、業時と伸びず、其後縣の政論は兩派に分れ、一は箱田六輔等牛耳を執り、他は中村耕介等會盟に主たり、蓋し兩者の目的を問へば、孰れも藩閥的政治を掃蕩して國民的政治を劈開するに非ざる無し、唯だ其手段に徑庭あり、前者は急進を主として、後者は漸進を唱ふ、前者は革命的進取黨とも稱す可く、後者は秩序的改善黨とも謂つ可し、此兩黨の系統は繼承して二十年後の今日に至り、前者は玄洋社——筑前協會となり、後者は則ち自由黨とはなれり、其間兩黨の格致は歲月と共に加はり、選舉に従ひて激し、終には同郷竹馬の親朋を以てして、道路に相合ふも、互に睥睨して腕

を扼するに至る。

是れ此影響は知らず譲らず一般社交の上に及び、一の學校を興さんとするも、彼は協會の主唱に係る、自由黨は同意す可からずといひ、一の港灣を築かんとするも、是は自由黨の計畫に成れり、協會の干する所に非ずといふに至り、筑前一帶公同の利益の之が爲に遮碍せられしもの亦實に一にして足らず、幸にして政理の漸く多衆の頭腦に釋け來れると、又國家多難多事なるに會したると、同時に縣下の事業逐年に勃興し來りたるとは、交々社交上融和の必要を感得せしむるものなり、是に於てか「解け會はうじやないか」の聲は對立の兩陣中より起るを聞けり。

既に「解け會はうじやないか」の聲あり、兩間の針線暗に繼ぐ人の繼ぐを待つ、是時に當りて身其家と兩者の局外に在り、而も三世紀間の縁故は金條鐵索もてゆひ着けたるよりも堅き黒田家の少壯なる侯爵、傍より來りて共同一致の利を説示すあり、恰も是れ福音の聲なり、一陽九地の底より回り、春風春水一時に來るの想あり、筑前俱樂部は咄嗟頃刻の間に成れり、而も此俱樂部たる形こそ似たれ、全く彼の九州俱樂部なるもの、不透明なるに同からず、簡單なる組織、明白なる目的、共に玲瓏にして白日に透見す可し、是れ亦郷國筑前人士の進歩の一徴に非ずといふ可けんや。

### ◎遠賀川流域の實坑 上

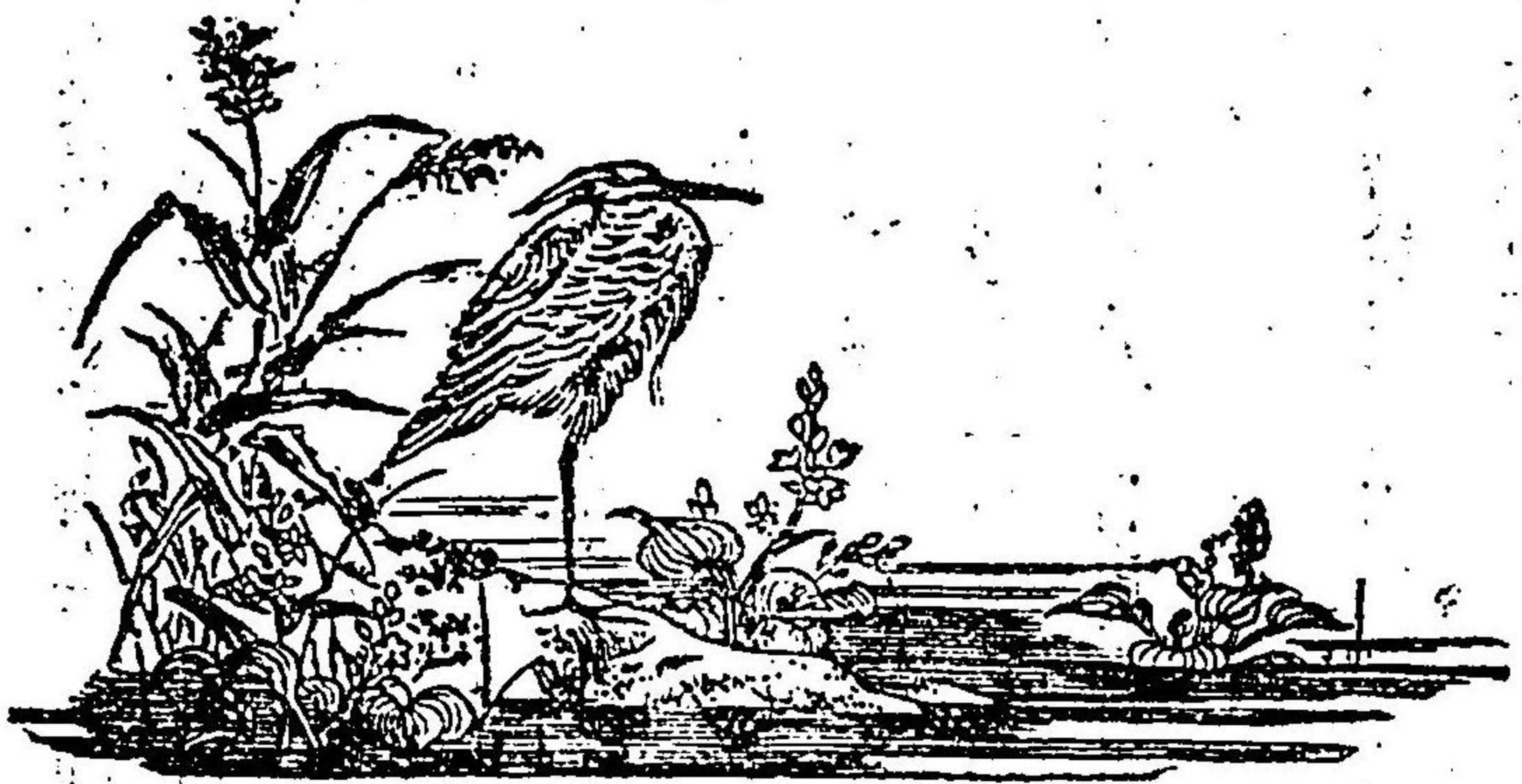
一川は古處の山嶽より發して北に向ひて下り、一川は彦山の山脈より落ちて西北に流れ、直方なる一通邑の近傍に至りて相合し、而る後大水となりて更に北に向ひて馳せ、蘆屋の津に至りて玄海洋に入る、之を遠賀川と爲す、其狀幾とY字の形を爲す、此Y字形の流域一帶濶然として敞坦の一大曠野を開く、是れ此曠野は二州に分屬して四郡を爲す、其東に在るを豊前の田川郡と爲し、其他は皆筑前に屬す、南に在るは嘉穂郡にして、中央に在るは鞍手郡、北のかた海に瀕するは遠賀郡なり、此間に二十餘哩到る處の村落田野、地として炭層に非ざる無く、土として煤田に非ざる無し、是れ我所謂遠賀川流域實坑にして、造化の妙機久しく地底に藏して明治の天地に贈りたる所なり。

斯くの如き天賦の無盡藏も、二百年前に在りては人多く之を知る者あらず、偶々之を知る者あるも、其用法たる太た微々たりしのみ、貝原益軒が土産考に

遠賀鞍手嘉麻穂波宗像の中所々の山野に燃石なるものありて村民之を掘取りて薪に代用せり遠賀鞍手には特に多し頃年糟屋の山にても掘れり煙多く臭悪しと雖も燃へて火久して水風呂の釜に焚きて良し民用に最も便あり。

是れ恐らくは土人の眼底に燃石の映せし始めならんか其後の歴史を釋ぬれば、有味なること尠からず、寶曆年中當時の藩主黒田光之、遠賀川の水害を除かんと欲し、遠賀郡楠橋村なる壽命より同郡陣屋潟に至る運河を開鑿せしむるに當り、偶々吉田村の地に於て人夫等一地を掘りて竈を造り、湯を沸かさんとして、其火忽ち黒土に燃へ移り、焰々として煙を發しければ、人々始めて其石炭なることを知れりと云、斯の如き奇談は尙ほ處々村民の口碑に傳はるべし、是時に當りて誰か此灼々たる燃石の水風呂用以外に、一州一縣厚生利用の大原たる可きを思はんや、況や此燃石が東方帝國の一大富源たる可きに於てをや。

惟た夫れ智巧の進歩と生存の競争は、漸く人を驅りて造化の領内に侵入せしむるあり、天保年中に至りては此福岡領の石炭は、焚石と稱して三種物産の一となり早く藩財政の一新利源となれるあり、小倉藩亦之に倣ひ、茲に田川の炭坑を開鑿せり、降りて幕末の時代に及べば、大ク、炭即ち塊炭は既に御用炭となり、軍艦汽船の運用に資し、東海の武陵桃源國にも必要不可欠の一物質たるを公認せらるゝに至りたり、而る後ち此炭層煤田、數万歳にして大に顯はる。然れども當時の制は其事業藩政府の特權に屬し、自由採掘を得ず、自由販賣を得ず、且つ其毎年の採掘額も、一億万斤を過ぐるを許さず、願ふに當時一億万斤といへば無上の大數を感せしならん、藩政府は藩の財源として之が採掘に力を致し、固より一億万斤を提舉するに至らざりしならん、既にして廢藩置縣となり、茲に個人營業の自由を得るに及ひ、彼處の田間、此處の原頭、九泉に通するの巨口は開かれ、春秋一國の母子に非ざるも『大隱の中、其樂や悠々たり』を歌はしむるに至り、若松門司の兩港より輸出するもの、みを以てするも三十五億万斤以上を算するには至りたり。



◎遠賀川流域の竇坑 中

試みに筑豊鐵道の起點たる若松港頭の停車場より瀛車に上り、南を指して發す可し、僅かに一驛を過ぐれば線路に浴ひて早く岩崎糸吉氏が深阪炭坑(炭出三千二百萬斤)に及九州炭坑會社の第二新炭坑(炭出四千六百萬斤)に會す可し、而して弓手に左納權一氏が大辻炭坑(炭出一億二千八百萬)の烟突を望み、馬手には中西太七郎氏が第一大隈炭坑(炭出三千万)の煤烟を見る植木驛を出づれば、左に三菱會社の新入炭坑(出炭二億五千五百万斤以上)の黒雲天に漲るあり、其東方には中西七三郎氏が金剛炭坑(炭出二千六百万)の瀛笛空に響くあり、漸く直方に近づけば南西遙かに大ノ浦炭坑(炭出二億七千一百万餘)を望む可し、是れ諸炭中第一の出炭を以て知られたる貝島大助氏が所有山なり、其傍には堀三太郎氏が宮田炭坑(炭出三千八百万斤)あり瓜生卯太郎氏が白鶴炭坑(炭出二千八百万)あり、瀛車進みて直方驛に到れば許斐鷹介氏が本洞炭坑(炭出約九千万以上)の烟突林丘に聳え、首を東に回らせば同氏が下境本洞炭坑(炭出一億二百万)、長谷川芳之助氏が藤棚炭坑(産出八千九百万)、城

野琢磨氏が日焼炭坑(炭出五千、一百万)相次ぎて見はれ来る、驛頭の線路左右に兩岐す、右線を取れば、沿線一路點々たる炭坑去りては又来る、順路に由り北より南に之を數ふれば曰く、堀三太郎氏が御徳炭坑(炭出二千、三百万)、曰く鷹取行藏氏が新御徳炭坑(炭出五千、一百万)、曰く古河市兵衛氏が勝野炭坑(炭出約一億、二千万)、曰く森清高吉氏等が杓拔炭坑(炭出六千、二百万)、曰く杉山徳三郎古河市兵衛兩氏が目尾炭坑(炭出二千万)、曰く住友吉左衛門氏が庄司炭坑(炭出二千、五百万)、曰く三菱會社の餘田炭坑(炭出二億、三千、五百万)、曰く松本潜氏が高雄炭坑(炭出二億、五千、八百万)曰く麻生太吉氏が芳雄炭坑(炭出約七千万)、住友吉左衛門氏が忠隈炭坑(炭出七千、四百万)相次ぎて出で、一路極まる處には三菱會社の碓井炭坑(炭出九千万)あり、尙ほ此東には海軍の豫備炭田として億万の無烟炭は地底に伏せりと云ふ、乃ち前線を辿りて下り、箭の岐點たる直方に到り、更に左線の鐵道に上れば、先づ来るは長綱好勝氏が赤地炭坑(炭出四千、三百万)、次ぎて来るは安川敬一郎氏と平岡浩太郎氏が赤池炭坑(炭出二億、六千、一百万)是れ豊筑の炭坑中收穫第二に數へらるゝ所

のもの、更らに進めば毛利侯爵が金田炭坑(炭出九千、八百万)、谷茂平氏が金谷炭坑(炭出五千万)あり、而して平岡浩太郎氏が豊國炭坑(炭出一億、五千万)是れ將來は大ノ浦赤池を駕して更に其上に登る可きの勢あり、尙ほ此より川上に溯れば、藏内次郎作氏が峯地炭坑(炭出四千、四百万)久良地寅次郎氏が起行炭坑(炭出九千万)あり、武腰寅太郎氏が小松ヶ浦炭坑(炭出四千、七百万)あり、高倉良米氏が宮尾炭坑(炭出三千万)あり、豊國東に去れば福島良助氏が田川採炭(炭出二億、四千、一百万)亦一方の雄とす可し、又遠賀川Y字の中腹には明治炭坑會社の有する大城炭坑(炭出約一億、八千万)あり、其他同郡の上二夕には岩津房次郎氏が多賀野炭坑あり、山鹿には城野琢磨氏が大君炭坑あり、二坑孰れも出炭(三千、二百万)伯仲の間に在り、若し夫れ是より以下の小坑までを併せ算しなば無慮六七十坑に上る可し、如何に炭坑事業に不用意なる人と雖も、之を聞かば「吁亦盛哉」の聲を發す可し、余の如きも正しく其一人なりき。

是等の炭坑たる、其大なるものは工夫を役する數千人に上り、其小なるものと雖も、

亦數百人に下らず、今更其重なる一坑の現状を擧示しなば、以て其他を概するを得んか、平岡安川兩氏が經營する赤池炭坑は豊前の田川郡に在り、其區域は三箇村に跨り、箇中の小字を討ぬれば、二百十一の多きに至る、此炭區の全面積は三十六萬餘坪を算す、明治二十二年より開坑し、經營茲に九星霜、其間幾多の困厄を重ねたるも、『毎經一難百倍來』の勇氣を奮ひ耐忍を積みて、今は則ち筑豊四郡中一二の地歩を占むるに至れり、今更茲に六月此地に遊びて目のあたり本坑を踏る、坑は第一第二第三の三坑に分れ、其第一は豎坑にして第二及第三坑は斜坑とす、孰れも裝するに新式壯大なる泰西の機械を以てし、運搬滾々として晝夜に息まず、われ坑長に導かれて第一坑より入る、坑は所謂豎坑にして垂直線の巨孔は水平よりして地底に通ず、一たび此孔口に臨めば、神驚き氣戰なきで、六月の暑天に覺えず肌に粟を生ず、而して坑中に往來する人の上下、石炭の扛擧には捲揚機械の裝置あり、身一たび揚卸板上れば、漸々として坑中に下る、而して我履む所の脚下の板面孔中の蒸氣を壓するを以て、壓搾の氣は反抗して人の鼻口に迫るあり、黒闇々の裏ら忽ち氣

息の奄々を致す、而して身は益々地底に下る、此間だ一種の想像は腦底を衝きて幻出し來る、曰く未來に若し地獄あらば、地獄の街道は夫れ斯の如くならん乎、穴畏ろし穴恐わや、既にして又思ふ吾等現世に於て罪障深し、後世には必ず地獄に落ちん、然らば是れ地獄旅行の演習なり、現世既に地獄旅行の演習を試ぬみ、地獄も亦何かあらんと、一たびは則ち以て怖れ、一たびは則ち以て喜ぶ、而して喜怖未だ終らざるに、身は早く一百八十尺の地底に達す、乃ち坑長の先導に従ひて進めば、地底の阡陌は東西南北坑に亘り、井然として一毫亂れず、其坑幅は十尺以上に及び、其坑高は六尺に出でたり、而して阡陌の坑道到處鐵軌を敷設して炭車の運轉に資せざる無し、試に携ふる所のカンデラーを懸して坑壁を看れば、漆黒滴るが如き炭層は連環重疊して左右に壁立せり、百千の工夫は其間に在り、鶴嘴を揮ひて炭壁を削劈す、其音憂々今尙は耳底に遺るを覺ゆ、此日坑中を巡行すること一里に超ゆ、然も其巡行したる處は僅に坑道の一分たるに過ぎず、亦以て其業の盛大なることを想見す可し、凡そ此炭坑に關し、鐵工場あり、氣罐室あり、機械室あり、鍛工場あり、

大工場あり、倉庫あり、病院あり、避病院あり、事務を取るには事務室あり、退き  
て居るには舍宅あり、物として備らざる無く、用として賤らざる無し、而して之れ  
に従事する役員、醫師、藥劑師、機械工、火夫、運轉手、大工、左官、煉火工、衝  
生夫、坑外雜役、土方、坑夫と、其家族とを合すれば現に二千六百十七人の多きあ  
り、誰か思はる山間の僻境に斯の如き殷繁榮なる一の別天地を現出せんとは、若  
し詳に其光景を文字の間は寫出せんと欲せば、筆を秃するも盡すを得じ、只此一坑  
現況の一斑、以て此坑を想像す可く、併して諸坑の有様をも概見す可し、黎面の坑  
夫鶴嘴を叩いて歌て曰く『彌陀の御光は奈落で光る何處の阿房が娑婆で泣く』



○遠賀川流域の寶坑、下

舊事業を営む者は舊人物なり、舊人物の信仰は概ね保守宗なり従ひて舊事業の前面  
には冥々の裏に高札あり、曰く「新人物此内に入る可からず」、即ち彼輩の新人物を  
見るは、紙屑拾と其科を同くす、多少の氣ある者誰か忌ましく、しとの感なからんや、  
新事業の新人物の手に由りて興起せらるゝもの、抑も偶然に非ざるなり、是故に明  
治の新事業たる遠賀流域寶坑の開山には個黨不羈磊落豪放の士尠からず、試に其二  
三子を擧數せん乎。

貝島太助氏は父子二世相繼きて炭山の坑夫たり、西に傭はれ東に役せられ、零碎の  
賃銀を得て炭を掘り鑛物を運びし者、其間には炭坑陥落して二回まで生ながら寶中  
に葬られしことあり、而も此人膽氣あり奇智あり、坑の陥落するに當り、氏は提ぐ  
る所の鶴嘴を揮ひて之を地上に打込み、頗然一伏其傍に横臥し、其鶴嘴に由りて炭  
石の頂上より墜落し來るものを支え、一息を容るゝの餘地空隙を遺して、徐ろに人  
の外より掘り出すを待ち、何時も九死に一生を得たりと云、而して終に鶴嘴一把の



任に任りて、筑豊第一採坑の開山となり、現に經營せる大久浦、菅牟田、大谷、第一香月及中間の五坑より出たす所の炭額は一年四億五千万斤に下らず、役する所の工夫は八千以上に及べり、人を知りて善く任じ、毫も制肘せず、故に人争ひて之れが用を爲すと云。

松本潜氏安川敬一郎氏兄弟の如き、曩時多少藩の理財に干せしといふ雖とも、要するに所謂チンチク殿たるに過ぎず、而して一旦奮起して坑業に従事するや、兄氏は内に在りて蕭何となり、弟氏は外に在りて韓信と稱せられ、今や赤池及高雄の大坑山を擁して肩を貝島氏に比せり、平岡浩太郎氏に至りては明治十年叛軍の殘黨なり、福岡の軍敗れて衆散し、許斐鷹介氏と篠笠を戴き青箆を被りて豊前より日薩の境に入らんとし、途今の經營せる赤池炭坑の下を過ぐるや、追騎の爲めに及はれ、殆ど擒せられんとし僅に脱せしと云。是時に當りて誰れか此山下の落武者が異日此山上の主公たるべきを想はんや、落武者自身と雖も、亦夢想だにせざりしならん、而して今や氏は裝置炭出共に三池に次ぐ可しと稱せらる、此赤池炭坑を有するのみならず、炭質炭量異日筑豊の諸坑に冠たる可しと期待せらる、豊國炭坑を併せ有し貝島安川兩氏と與に坑業上の三傑と地方に羨望せらる許斐氏亦一手に本洞及直方本洞の二坑山を提げ、坑業界の一方に雄視するには至れり。

目下是等の新事業主が收得たる、多きは三四十萬圓に上り、少きも一二十萬圓に下らず、其他一萬圓以上の利益を擧ぐる者を數ふれば、屈指するに違わらず、凡そ是等の徒たる、徒手を揮ひて吠吠より起ち、空擧に唾して素寒貧より興りたる者多ければ、諸山開坑の沿革を聞けば、恰も史記の列傳を讀み、ブリユタルクの人豪傳に對するが如きの感あり。例へば平岡氏が赤池炭坑に於けるが如きは其一なり、彼は十年の戦敗後流離顛沛し、明治二十一年の頃、其徒の健兒八九名を率ひ、僅に二十圓の金を懐にして赤池に至り、悉く其金を投して酒饌を具へ、大に近傍の村民を會して之を饗し議るに坑山試掘の事を以てす、村民等視て以て大福長者の來降と爲し、立どころに承諾連署の牒を納る、是に於てか山上に掘建小舎を構え、坑夫を集めて直ちに開掘の業に着手せり、而も此間時既に囊底に一錢を遺さず、刻下の口糧すら

之を辨するなし、乃のち楸を遠近の知友に飛ばし、或は數苞の米を借り、或は數圓の債を起し其薪料用材の如きは健兒交るゝ山中に入り、其官山と民林とを問はず、手に任し伐採して給を取れり、或日の如き監林の吏來りて之を捕へんとするあり、健兒提ぐる所の斧を揮ひ、大喝して之に向ふ、監吏失魄山下に墜顛せり、健兒の社視て大に笑ひ、手を拍ちて快哉を叫べりと云、是に至りて村民始めて山上君子の水滸傳中の人たるを覺りたるも、亦奈何ともする能はず、斯の如くして拮据經營、十年餘の久しきを重ね、終に今日の盛況を致せり。

此に面白き一語あり、今年一月一日若松行の列車が小竹の驛に次するや、會々一賤夫の身には坑夫の山着を着け、手に一把の鶴嘴を携へ、來りて上等客車に入る者あり、車中在る所は高帽被服せる地方の紳董に非ざる無し、衆相顧みて私かに指目せり、既にして一紳士の後れて車に上る者あり、前きの賤夫を見て恭しく揖し、且つ問ふに其人の故さらに賤服賤衣坑夫の狀を爲す所以を以てす、其人一笑答へて曰く、奴の今日あるは一に松本潜君眷顧の惠に由る、今日其若松の門に上り、新正の

賀を致さんとす故に此裝あり、聊か其本を忘れざらん、と欲するが爲のみと、前きの指目せし者之れを聞きて大に感嘆し、爲に皆容を改めたりと、此一客は則ち坑夫より起り、今や松本氏と共に一歳の炭出二億六千万斤の大坑高雄を經營せる中野徳次郎其人なり。

顧るに高祖錙を積み、曾祖銖を重ね、祖父一厘を餘し父一錢を贏し斯の如くして富を爲せる者は、吝嗇性を爲し、錢の爲に生れて錢の爲に死するの觀あり、守舊の産業家に守錢奴多きは其れ是が爲なるか、新事業家に在りては之に異なり、其富を致したる已に由る故に假令之を失ふあるも亦憾むる所あらず、故に新事業家多くは快活にして大膽なる所あり、而して是等の事業家に多とする所は、善く少壯有爲の子弟を用ゐると、比較的公共の事業に其私財を犠牲とするに在り、此二つのものは大阪的商人などの夢想にだに上らざる所ならん、殊にわが是等の新事業に喜ぶ所は、國家の廣益などいふ經濟家くさき議論の外、地方人の仕事生出したる一事に在り、就中士族の仕事生出したるに在り、惟ふに彼の士族たる、牙籌を執りて錙銖を争ふ

は町人に如かず、鋤犁を把りて田圃の利を收むるは百姓に如かず、而かも生活の刺  
 衝は已むを得ずして町人を學び百姓を學ばしめ、失敗せざる者殆ど稀なり、幸にして  
 地方に坑山事業の興るあり、此事業の大分は是れ勇氣ある者腕力ある者に待つ<sup>た</sup>の業  
 たらば、恰も士族に打つて著けの業たるなり、而して彼の粗放なる者磊落なる者も  
 是れならば亦從事するを得べし、われ今筑前に入りて舊友を見る、其坑夫を相手に坑  
 山に従事する者と、其腰辨當チヨコノ走りにて縣廳郡衙に通勤するものとは志尙  
 の際氣習の間に迥然大に異なる者あり、異日陳涉吳廣の徒、劉邦項籍の流、筑前よ  
 り起るあらば、穴中の君子其れ或は多からん。

○若松港

禍福は絆へる繩の如しと古語にいふ、絆へる者何ぞ獨り禍福にのみ限らんや、物産  
 と交通の關係に於ても亦又これを見る、顧るに物産興りて交通開くるものあり、交  
 通開けて物産興るものあり、兩々交るしく因となり果となりて、而して兩々相並び  
 て益進む、今日のあたり之が例を見るものは、則ち若松港の現状と爲す、抑も若  
 松港は筑豊の州界に近き洞海なる大灣の口頭にあり、十年前までは蕭條たる地方の  
 一漁村、狭小なる和船の寄泊處たるに過ぎず、從ひて四近地方の人に非ざれば、其  
 名を知りて之に留意するもの幾と稀なりき、然るに會々遠賀流域四郡の野に大に坑  
 山の開くるあり、萬億の石炭は出口を門司及若松に求め、而る後ち、神戸、大阪、上  
 海、香港、新嘉坡、浦潮の各地に播輸す、是に於てか前きの蕭條たる一漁村狭小なる  
 一泊地は忽ちにして萬億石炭の集中點となり、茲に殷闐繁榮なる一海港とは變した  
 り、  
 今更此海港の如何に殷闐繁榮なるかを知らんと欲せば海陸兩路より此一點を指し、

朝々暮々に集中し来る汽車船舶の數字を檢す可し、筑豊鐵道は四郡石炭の運輸を主眼として興りしもの、其起點は即ち此に在り、三十餘坑の石炭皆此鐵道を經由せざる無し、而して毎日運ぶ所の炭量六百五十萬斤に下らず、之が爲に運轉する所の列車は毎回概ね四十餘輛を聯ね、本支兩線の往復を合すれば七十回の多きに達せり、是を以て九州三界の一隅に在る此新興の港頭に、重量二十噸を扛擧す可き一大水壓起重機あり、同じく水壓ホイストあり、又蒸氣起重機あり、停車場内に敷設せる鐵軌は恰も蜘蛛を曳けるが如く、之を延長すれば十哩余に達しポイントの數のみにも一百以上を算するに至る、斯の如きは全國の鐵道を通して、未だ曾て見ざる所而して是れ單に鐵道の事のみ、其他遠賀川より吉田江、兩運河を経て若松に往復する所の載炭船所謂河船カヘボネと稱するものは、十隻約一萬斤を容る、此河船の水上に浮ぶもの總計六十隻を下らず、昨二十九年一月の統計に依れば、其日に石炭送りて港口に来るもの平均四百隻に減せざれば、炭量亦四百萬斤に下らず、此水陸兩路より來り港頭に集中する石炭を受取り、港門を離れて東西各港への大回漕に任ずるもの

は別に三四十噸より五六百噸に至るの船舶あり、築港會社の統計は報ずらく、日々の出港百隻を超ゆと、故に一たび此港に來れば無数のジャンクは灣内に簇集し、帆船の林立するもの數哩の間に綿亘せり、斯の如き光景は廣東廈門の埠頭に見たるより外は、我國に於ては曾て夢想だもせざりし所、其朝々に白帆を掛け、外洋を望みて漕出づるに當りては櫓聲帆影は、遠く門司馬關まで連なり、六連白島の間に相映す、美景壯觀言ふ可からず、若し大詩人を呼び來りて此狀を寫さしめば、定めて一世の耳目を清澄するに足らん。

港頭既に斯かる大物産の大集配所となる、是を以て昨日の漁場は今日の市店となり、去年の田圃は今年の宅地となる、五七年前一反數圓の地、今は一坪幾圓に價するに至る、現に若松築港會社が埋立地を製造したる當初には一等地の坪價十五箇年賦十五圓としたるも尙は需用者なきを憂へしものが、今は即金二十圓にて飛ぶが如くに賣れ、又市中の最要地は坪價五十圓に直すと云、以て市況の一斑を知る可し、斯の如くなるが故に、富豪の徒争ひ來りて資を投じ、三菱も來れば三井も來り、住友も

來れは吉河も來る、曰く鐵道會社、曰く取引所、曰く築港會社、曰く銀行、曰く何、曰く何掌大の港上に四箇の銀行並立共榮する、其偶然に非ざるを見る可し。

港の港たる是だけにても既に將來の進歩發達を期するに餘りあり、而るを況や今は又其灣内に一千餘萬圓の巨資を投して本邦第一なる一大製鐵所の興立せらるゝに於てをや、此製鐵所の地は港の對面なる八幡村に在り、之が用地として既に三十萬坪の地を收用し、長官以下の事務官二十餘名は五月以降此に移り、早く收用地中一の民家に假廳舎を開らき、既に事務に従事するあり、今や將に官舎及鐵路の工事に着手せんとす、聞く前に歐州に派遣せられたる大島技監等も八九月までには歸朝せんとすといへば、若松港上の發達は更に此一大原力に由りて愈々益々促進す可し。

今月一日より以降筑豊鐵道會社は九州鐵道會社と合併し、小倉より若松の戸畑に達する鐵道の一線路は又新に着手せられんとし、物産の集中益々増進する傍には製鐵所の創立あり是に於てか、若松築港會社の事業は更に擴大皇張の必要あり、此必要より促がされ現に四十萬圓の資本を以て經營せる事業を一進し、資本を増加して百五

十萬圓とし突堤を延長して千二百五十間とし海底を浚渫して二十尺に至らしめ、水道を玄洋の郵船航路に接続し、二千噸までの船舶をして自在に出入す可からしめんとす、石黒技師が設計既に成り、有力なる資本家既に集まり、是より將に此擴張に従事せんとすれば、其成功亦疑ふ可からざるものあり、若松港の前途も亦多望なる哉。



## ◎博多港

中央政府の移動、海陸通路の開擴、若くは内外國交の進歩等は、忽にして土地の關係を一變し、昨日は宮女春殿に滿つるの地も、今日は村童麥秀を歌ふの墟となり、過去には極目人烟を絶てるの原も、現在萬戸丹碧を連ぬるの境となる、寧樂鎌倉の衰亡、横濱神戸の繁榮、觀來れば今昔の感を催さるもの稀なり、此間に在りて依然千古の俤を留め、未來益々隆昌の望を繋ぐに足るは、唐船の往來を謠曲に追懷せしめ、隋唐の文物を埠頭に接納したる筑前博多の一港となす。

所謂「四つの船」埠頭に纜を解きたる王政時代博多は暫く擱き、封建時代に在りては本港は西南一帯に於ける貨物集配の中心點なりき、而して近時海には汽船陸には鐵道の便大に開くるに及び、人或は此中心點が焦點たるを失ひて、其繁華を三四の市港に奪去せられんかを疑ひしも、自然が贈りし海陸咽喉の好位地は、這般交通機關の整備に従ひて益々重きを加へ、明治二十二年以來は特別輸出港となるには至れり、現に昨年の統計に徴するも、一歳中内外に對する埠頭の輸出入額は、一千萬圓以上の

多額に上るあり、是れ五開港中の最舊開港たる長崎港すら且つ及ばざる所、加之本港の東部に接壤せる糟谷の一郡は亦た是れ滿地炭層の埋伏する所現に開掘運出する所は、僅々其一分に過ぎざるも、尙ほ觀る可きの巨額に上れば、將來今の海軍備豫坑が一般人民に開放せらるゝか、若くは海軍自身盛に開掘するが、二者其一に出づるに至らば、其採炭は何處に向はんや、必らずや出口を最近地方なる博多に求めて四方に出でん、然れば博多の繁榮は今より更らに幾層の進歩を見ん。

只だ惜むらくは博多現在の埠頭たる、市上を串下せる那珂石堂兩河の流沙に埋められ、其遠淺にして沙洲多き、大船巨舶の寄泊に便ならず、地方の有心者之を憂ひ、久しく博多築港の企あり、幸にして灣の北奥、市の前岸なる西戸崎に恰好適良なる庇蔭地の在るあり、現に其海を實測するに、深さは二十尺以上に達し、淺きも十三尺より下らず、是に於てか博多灣鐵道築港會社は興れり、其計畫たる、陸には鐵道を九州鐵道及其他の線路に接続して、新港との連絡を取り、海には七區の大埠頭を築造して、東西萬里の船を招致せんとす、今や此事業は政府の許可を得、黒田、

島津、細川等の大華族進んで之が株主たるを見れば、其成功亦年月を指して期す可きものあらん、是等の装置にして完成せんか、嘗に西南地方の物貨集配場たるのみならず、又海外に出だすありて入ることなき特別輸出港たるのみならず、萬國を待つ可き公開の一大貿易港たる實質資格を挾有するに至る可し。

◎其他の各港

博多港には此他にも尙ほ恰好の庇蔭地あり、博多を距ること三里餘にして灣の西部に今津あり、之を修築せば亦一良港と爲すに足る、而して同じく亦陸に鐵道の頼る可き利便を有す、今や今津築港事業は地方の有力家に由りて計畫せらるゝものあるを見る。

此地を過ぎて更に西し、志摩の半島頸を横過し去れば、船越灣の突として陸地に變入するに會す可し、是れ嘗て我海軍の夙に注目せし一要地なり、此地を修築して一港を開き、更に之を起點として一線の鐵路を東西に馳せん乎、筑西肥東物産亦此に吸集するに難からず、所謂船越鐵道會社は此兩工事を目的として起れり、而して今

や其船越鐵道は業に既に政府の許可を得たるあり、是よりして此の港頭より新に呑吐の一口は開けなん。

以上擧げたる若松博多兩港の中間に更に、一海港の將に新興せんとするものあり、之を津屋崎港と爲す、港は宗像郡の玄海洋に面する西方にあり、從來食鹽を産出し、津屋崎鹽と稱して關西に聞ゆ、一千の人家、七千の生口、夙に地方の通邑たり、若し此海上より來りて此港頭に上り、其位置を願れば、右手に糠谷一郡の坑山を控へ、左手に筑豊四郡の石炭を引くの概あり、地方の人士早く此に着眼し、七十萬圓を以て築港の業を了へ、二百萬圓を以て鐵道の擧を遂げ、九州及船越等の線路に連絡し、全筑東西の物産をして此一口に集中せしめんと計れり、今や其計畫は着々として日に實行に近くを見る、亦是れ一箇有望の擧なり。

筑前の諸港と豊筑の坑山とは略々之を擧敷したり、若し又眼を福岡の一縣に注むれば、筑後に三池の大坑山あり、豊前に門司の新海港あり、而して糟谷の坑山は是より將に中外の視線を四引せんとす、但だ門司港は東西郵船の航路に在り、人々の善

く熟知する所、三池の洪大亦今に於て絮説するを待たじ、而して精谷の諸坑には留  
鏡日少くして足痕を印せず、暫く此に之を省き、後日再遊の旅囊に入れん。(福本註)

●狂歌行贈四兄

杜甫

與兄行年校一歲、賢者是兄愚者弟、兄將富貴等浮雲、弟竊功名好權勢、  
長安秋雨十日泥、我曹騎馬聽晨雞、公卿朱門未開鎖、我曹已到眉相齊、  
吾兄睡穩方舒膝、不襪不巾蹈曉日、男啼女哭莫我知、身上須繒腹中實、  
今年思我來嘉州、嘉州酒重花繞樓、樓頭吃酒樓下臥、長歌短詠迭相酬、  
四時八節還拍禮、女拜弟妻男拜弟、幅巾盤帶不掛身、頭脂足垢何曾洗、  
吾兄吾兄集許倫、一生喜怒長任真、日斜枕肘寢已熟、啾々唧々爲何人、

●行樂畫記

世に武裝的文學なるものあらば、我が徒は謹て之を奉せん而して『武裝的文學者』是  
れ我徒の生涯なるや亦た未だ知るべからず文事ある者は必ず武備ありと云ふ是れ我  
が徒の志に非ずや且つ夫れ男子自ら男子的の快遊なからんや徒らに雨を聞き風を

傷み紅を評し紫を品し沾々自ら喜ぶは我徒の敢てせざる所況んや此の秋光の佳きに  
遇ふ天地豈詩人俳家の有ならんや殺風景と云はゞ云へ没風流と笑はゞ笑へ兒戲可な  
り野暮又た可なり一簞一瓢一日の行樂を野外に試みんと約束は即席に成立ちぬ場處  
と時日の問題は次で起りぬ幾もなくして此問題は決せられぬ曰く十二月一日午前六  
時集合鴻の臺に向て發す

期に及で會する者不鬼我後鐵の徒各々輕裝簡撲瓢を腰にし簞を懐にす其風怪異道路  
相指笑す而して鬼子の黒三紋付の羽織を着けながら頸に赤毛布を纏ひて結束したる  
不子の洋装して七ツ道具を身邊に纏ひたる兩々相照應して物の奇觀を留めたり  
既に集合點を發して目的地に向ふ沿道市街の曉景掬す可し柳原を過ぎ兩國を渡り本  
所街道に出で一直線に進行す、橋に市郡の形象一目截然たるを稱し逆井の橋に風  
景の徒大にして捕捉すべきなきを嘆す是より四邊の風物一步は一步より野趣を生じ  
目迎へ足進み豁然として家盡き水流るゝの坦道に出でし時は覺えず快哉を連呼せり  
則ち草を籬さ堤上に踞して瓢君を傾くれば始めて塵寰を脱して自然に接するの想の



あらしなり

行きくして日は巳に亭午ならんとす後途偶々聲あるが如し不子乃ち其望鏡を取りて顧望す莞爾として曰く素子なり素子なり衆又相顧みれば後方數町に方り一抹の墨子蠢爾として行進し來る漸く近けば素子の風采躍々として現はる素子は篤士なり今朝の集合蓋し期を愆り急駆疾歩一行を追ふて此に及べるなり是れ此遊行の一紀念と爲す可し幾もなくして市河に達す然れども未だ容易に渡に臨まず素子は急駆の餘勇を以て渡頭を偵察し先着者の有無を檢し來る是に於て相共に右岸の堤上に圍坐し江を隔て、鴻臺を望み切りに作戰の計画を案す滿山の紅葉爛燃えんと欲し白帆山の如く岸を歴して來る。

作戰計画は定められぬ曰く一隊は進んで東南の高地を占領すべし一隊は先着隊を搜索しつゝ糧食を徵發すべし即ち流をこそ亂さぬ渡を呼ひて江を渡り躍て前岸に達するや先頭部隊は蔭地後をも顧みず軍歌を奏して進撃したるは勇ましかりける次第なり後方部隊は路を轉して市街地に入り遍ぬく搜索を行ひ一酒家に就て大に瓢君の補

充をなし茲に酒家の童年六七才なるを得て教導と爲し部伍肅々徵發地に向ふ

童子の導きたるはトある稻荷の杜なり杜の小暗さ處に一茅屋あり部隊の進んで境内に入るや數羽の荒雞は遑たゞしき憂鳴を擧げぬ相顧みて曰く是れ天與なり吾等の任務は庶幾くは全ふするを得ん就て主人に面し笑て樊籠中の物を指せば彼れ領して之を解せり乃ち價を問ふて錢を投ずれば黒牝雞と其雄とは最後の悲鳴を放ちて吾等の手に落ちぬ

先是先頭部隊は奮進高地に向ひ突貫して之を占領したり則ち後方の聯絡を通せんが爲めに傳騎を出して路に要せり偶々後方部隊の搜索しつゝ前進し來るに遇ひ互に手を擧げて万歳を連唱し相携へて占領の陣地に向ふ占領陣地は何處畫中の一高角即ち真間山門の傍なる葭簀掛の一茶店是なり

此役に於ける軍隊區分は左の如し

先頭部隊	尖兵我子	傳騎素子	步哨不子
後方部隊	軍吏鬼子	輪卒後子	酒保鐵子

真間山の占領陣地たるや地を抜くこと五六間背面は直ちに鴻臺の丘陵に連り前面と左右兩側は展開して一望豁然刀禰川其麓を流れ真間の入江其陰に灣入す形勝昔より雄偉と稱す蓋し武總の一要地なり

眸を放てば市河の市街は眼下に在り溝續水涸れて蘆葦蕭々左は茫々たる沃野右は漫々たる一路遙に東京に通す夕陽灼赫真間灣に映するの時首を舉げて西方を望めば芙蓉は靨黴たる紫雲の中より模糊たる其顔容を現はせり色彩の美艶光芒陸離天地爲めに蕩けんと欲す

初め先頭部隊の此地を占領するや不子は陣地に留まり望鏡を以て絶えず山下を偵察し素子は傳騎として丁字形の畦畔を往返し遂に後方部隊との聯絡を通じて共に陣地に還れり而して獨り我子は路を轉じて搜索に向ひしが爲め之を須臾するも歸り來らず不子之を慮はかり自ら出て其跡を踵す之を久ふして山下の畔路遙かに人影の動くを見る其數三、始めは之を訝る漸く近けば我不兩子の形貌疑ふべくもわらず而して其一は確かに翁なりし翁は高齢なれば長途行軍に堪へず本所停車場より一躍して一

行を此地に待ち一泡吹かせんと謀りしも鵬の嘴と喰違ひ市河のトある旗亭に失望の太息を吐きく歸去來を賦せんとせしを天なる哉茲に我子に邂逅し足引摺りて占領陣地に向ふ途中不子も之に廻ぐり合ひ三人前後今しも信玄囊をぶら下げて徐々と山下迄は來つるなり

萬歳々々大勝利いでや是れより凱旋祝ひに取掛らん獲物の雞を是にと鉄子は息巻きながら用意の雞刀を抜かんとするを早まり玉ふな羽毛をいかにと茶店の老婆に參られて仕損じたりと雞を抱て小松林の中に駆入れば續けやくくと七人總掛りにて瞬く間に毛をむしりぬ

裸體の雞は雌雄俎上に枕を並べぬ誰かある執刀と云ふ下より翁は前みて謂ひけらく解剖は吾輩が事なり是れ見よと最初の刀を下せば蹄とも言はず骨と肉とは割かれけり誰か命じをさけん鍋には蓋もありコン爐には炭もたこれり流山の白味淋はお手の物堀立ての葱大根は鉢の上に躍れり瓢君次第に傾けば箸の下ること飯の如し食前方丈新侯爵の贅と雖も此江湖の美味は得て知らざるべし

日は既に傾きぬ而して雄談笑語益々佳境に入る遂に論功行賞に至れば先頭部隊と後  
 方部隊との間に衝突は生じぬ然れども各自平等に其任務を盡して會て弛怠無かりし  
 は作戰計畫宜を得軍隊區分遺憾なかりしの致す所其功須らく三級以上に在るべきな  
 り  
 今や凱旋の時期なり舊道に由りて歩歸せんか汽車を利して一氣歸京せんか此場合に  
 於ても初は硬説の勢力中々に盛なりしが何時の間にか全然軟説に一致しぬ而して尙  
 は説あり曰く同一の逕路は變化なし變化なければ趣味なし趣味なきは是れ我が徒の  
 志に非らざる也と吁人間ちう動物は何處まで己が弱點を掩はんと欲するものなるか  
 發車時刻は通りぬ去來と再び結束して立たんとすれば一日の清光流石に惜まれてあ  
 はれ虞淵の日を回へすべき由もなし今はと一行塵打拂ひ此日の主人たる老婆の勞を  
 勦りつゝ得意の古詩を朗吟して飛ぶが如く磴道を馳せ下りぬ。

の揺々として心はかりなる池水に映れる寒光凄覺えず身震ひしぬ打見回はせば月色  
 山下なる池の邊に立ちて端しなく願みれば望の月はやくも山の端にかゝれり其影  
 微芒恰かも天國に遊べるが如く低回踟躕去らんと欲して去ること能はず不子を塵さ  
 て自然の妙景を示せば彼は茫然として曰く如此風景画にならずと蓋し画にならざる  
 に非ずなす能はざるなり之を画家の負惜と云ふア、自然なる哉自然なる哉自然の妙  
 機は神の寓する所千兩萬兩此景何の時にか忘れんと幾回か願望しつゝ松原傳ひに行  
 くとはなしに停車場に出づれば行客雜遝人語喧囂身は復た塵俗中の人と爲りぬ別に  
 臨みて相約す行樂會は健康なれ而して何處迄も神聖なれ。

(同樂子)

萬物皆有託。我獨無所依。  
 迷々竟何事。把酒惜寸輝。  
 風雨又重陽。歲月疾如飛。  
 二頃田未得。流落欲安歸。  
 見彼休僮。憐戊方朔。  
 處世真已難。慷慨令人悲。



## ●東京の新聞社會

## ◎各新聞

試に東京の新聞社會を觀察せよ、先づ第一に吾人の注意を惹く可き大事實あるを發見せむ、大事實とは他なし、小新聞の勢力漸く大新聞を凌駕し、嘗に其販路を侵略するのみならず、大新聞をして紙面の体裁、記事の編輯までも次第に小新聞に倣はしむるの傾向ある是れなり、更に切言せば大新聞と小新聞との性質將に方物す可からざるに至らんとする、即ち是れ也、之れを新聞紙の進歩と謂はん耶、將た退歩と謂はむ耶。從來新聞社會に二種の階級あり、所謂大新聞と小新聞と是れ也、大新聞は猶ほ華族の如く、小新聞は恰も平民の如し、隨て大新聞は多く上流の人士に讀まれ、小新聞は概して中等以下に讀者を有す、蓋し兩者の記事、体裁の差異之をして然らしめたるのみ、故に大新聞には自然に大新聞の面目あり、小新聞には自然に小新聞の特色あること、亦猶ほ華族は華族らしく、平民は平民らしきが如くなりき、然るに今や其華族的新聞は平民的新聞となり、堂々たる大新聞を以て、挿繪政略、鉅種編輯に是れ汲々たる如き、又何ぞ其れ變化の太甚しきや。

『報知新聞』は會て大新聞として五指の中に數へられたるもの、而も今や全く從來の面目を沒了して小新聞となりしに非ずや、『毎日新聞』は亦大新聞中の最も眞面目なるものたり、而も今や軟化して小新聞に接近し來れるに非ずや、『時事新報』に小説劇評を掲載する如き、『日々新聞』に講談落語の速記を見る如き、亦多少小新聞の感化を受けたる結果に非ずや、而して斯の如きの時に於て、尙且つ頑然舊面目を維持して動かざるものは唯た一の『日本』あるのみ。

此の大事實は吾人に何を説明する乎、案ずるに初めは新聞紙の理想唯だ讀者を教育するに在りき、故に營利よりも寧ろ主義を重んじ、名譽を尊しとしたりども、今の新聞紙は主義よりも寧ろ營利を目的とするが故に、争ふて讀者の感情を迎合せんと勉むるもの、如し、是れ大新聞の漸く小新聞の臭味を帯び來る所以也。

故に今の新聞紙を評價するものは曰く、發行部數孰れか多き、曰く編輯費用孰れか巨額なる、曰く讀て面白るもの孰れなると、機關の設備孰れか整頓せる、此要件

に該當せる新聞紙は、最も勢力ある新聞紙と稱せられ、最も勢力ある新聞紙は、其性質小新聞に屬すと雖も、世間認めて以て大新聞と爲す、其狀恰も最大金力ある者は其智愚賢不肖を問はず、上流種族を以て目せられて會社の最大勢力家たるが如し、嗚呼是れ新聞紙の進歩なる耶、將た退歩なる耶。

此故に今日の新聞社會は、第一賣捌の方法を研究し、第二は客引の考案に苦心し、稱して紙面の改良といふも、其實自主的改良に非ずして、偏へに時好に媚びんとするのみ、總べての新聞紙悉く然りといふに非らずと雖も、滔々たる新聞社會多くは皆是れ也といふも可なり、酷評せば今日の新聞紙は一種の商品にして、唯だ最も善く時好に投ずるものは最も廣く購買せられ、隨て新聞紙として最も大なる勢力あるを得む、則ち政治新聞に艶種あり、實業新聞に小説ある所以にして要するに新聞社會の通有目的は、如何にして發行部數を増加す可き乎の一點に歸着す、此に於て平方今復た世に大新聞なく小新聞なく、唯だ多數の讀者を有するものは乃ち新聞社會の王たるを見るのみ。

以上の觀察果して大差なしとせば、新聞紙の品格は近來大に下落したりと謂ふ可く、世人亦漫に新聞屋と稱して、他の營利事業と別視せざるに至りしもの亦良に故なからんや、然れども一方より之をいへば、新聞紙の進歩たる點も亦尠しとせず、其の抽象的理論よりも寧ろ事實的問題を掲載するに至れるもの一進歩なり、其講義録様の記事を減じて通信報告の記事を増すに至れるもの二進歩なり、其政治上の觀察に偏せずして、社會一般の出來事に注意するに至れるもの三進歩なり、是れ或は新聞の進歩といふよりも反つて時勢の進歩したる影体なりといふを當れりとせむ、然れども其原動は孰れに在りとするも進歩は則ち進歩なり、况んや能文の記者輩出せる實に未だ今日より盛んなるあらざりしをや、吾人請ふ聊か各新聞紙の長短を論評せむ。

### ●新聞紙の特色

◎日本 此新聞の特色は莊重嚴正にして流俗に苟合せざるに在り、若し其短所をいへば、餘りにマジメにして滑稽の趣味なきと、輕快の調子に缺くる處ある是れなり、加ふるに紙面の体裁は、新聞といふよりも寧ろ雜誌に類する點ありて、例へば全紙

悉く振假名なき如き、雜報も論文的口調なる如き、社説に長篇多き如き、殆んど日刊雜誌の体裁を帯べりと謂ふ可し。

且つ此新聞は政治上の觀察に偏して、社會一般の觀察に乏しく、政治問題とせば、記事論說共に精到奇抜なるもの多しと雖も、政治以外の問題に至ては、漠然として殆ど相關せざるが如く、特に經濟部面の觀察に力を用ゐること少なきが故に、實業社會に讀者を有すること他の新聞に比して甚だ劣れり、要するに政治専門の新聞としては、日本は最も純粹にして又最も優等なり。

故に近時新聞の体裁概して多少の變化ありしに拘らず、日本は依然として舊來の面目を保持し、飽くまで大新聞の品格を傷けざらんとするに似たり、見よ世の所謂大新聞なるものは、今や孰れも艶種あらざるなく、小説を掲載せざるものなきに、日本獨り皆是れなきに非ずや是れ日本の特色にして、其長所も此に在り、短所も亦此に在り。

◎日々此新聞も『日本』と同じく政治専門の新聞にして、長州派特に伊藤侯の機關新聞と稱せらるる議論深刻にして辨難に長じ、或る點よりいへば直言忌まざるの概あるも、往々惡婆漫罵の口吻ありて人の嘔吐を催ふすこと少なからず、然れども舞文巧辭是非を顛倒するの伎倆、屢々政敵を苦め、其才鋒殆ど當る可からざるものあるは亦甚だ感嘆す可しと爲す。

此新聞今も現内閣の反對に立ちて、政府攻撃の急先鋒たりと雖も、原來御用新聞の系統を受け、累代政府辨護を專賣としたるが故に、文字議論自然に官氣を帯ひて、江湖の氣象なく、恰も花街落籍の莫連女が生涯脂粉の氣を脱する能はざるが如し。近來朝比奈碌堂在らざるの故を以て、紙面稍々活氣に乏しけれども、近事片々例に依て面白るきと、なんでもこゝの再度の旗揚とは、此新聞獨得の妙處として讀者の歡迎を惹くが如し、『近事片々』は多く無意義の惡口雜言なれども、滑稽調諷の趣味を失はざる警句も亦少なからずして、文字往々皮肉を穿つて肺腑に入る、他の決して企て及ばざる所『なんでもこゝ』に至ては、奇問奇答疊出して善く人の頤を解くの妙あり、正に是れ頓智の競進會にして、讀むもの亦抱腹絶倒す可し、澁柿翁の『歴

史小説』も此新聞の特色として誇る所なれども、千篇一律同脚色同材料のみにては更に面白からず、森槐南擔任の『文苑』、流石に材料豊富なれども、大雅の調少なくして徒らに太平を裝飾するの趣あり。

◎毎日。此新聞の特色は日本に比して今一層マジメなるに在りしと雖も、今や其面目全く變化して繪入新聞となり、振假名新聞となり、艶種あり、劇評あり、寄席の案内あり、落語の筆記あり、復た四角四面なる舊時の『毎日』に非らざるなり。

故に『毎日』の本領と稱す可きもの近來次第に褪色して、文學趣味に於ては『讀賣』に及ばず、政治問題に於ては『日本』、『日々』に及ばず、艶種に於ては『朝日』の文情巧緻に及ばず、經濟社會の觀察に於ては又『時事』の精確敏速に及ばず、若し強て其長所を擧ぐれば、島田三郎氏の議論時々聴く可きと、杉原阿彌の劇評往々讀むに足る可きと是れあるのみ。

◎時事。大新聞にて政治専門とせず、且つ何人の機關ともならず、何黨派の臭味もなきものは獨り此新聞あるのみ、故に政治を論すれば往々迂濶の見あるを免かれず

と雖も、社會の各方面を觀察して耳目の任を盡すに於ては、他の新聞決して『時事』の該博機敏に及ぶ可きものあらじ、此新聞は原と通俗を旨とし、文字平易なる上に總傍訓を施せるが故に、或る點に於ては小新聞よりも讀み易き所なきに非ず、而して此新聞は、社説も雜報も文体一致して一人の筆に成れる如き觀あり、世に所謂三田流の文法なるものは是れなり其短所は隨つて平板單調なるに在りと雖も、其長所も亦此に在りといふ可き歟。此新聞は從來文學趣味なかりしに、近頃は小説もあり、劇評もあり、又時文の批評もありて紙面自ら賑やかなれども、其批評も小説も一種の特色ありて『時事』らしい面目を具へたり、小泉秀太郎氏の『ボンチ画』は奇想天來の妙ありと雖も、亦『時事』の理想を脱する能はず。

時好に投じ流行を導くは此新聞の得意の伎倆にして、而も一步必ず他の新聞に先づの機智あり、其議論觀察渾べて「コムコムセンス」を基礎とするが故に、概ね平凡他の奇なく、乾燥無味蠟を嚼む如しと雖も、時に警拔俊出人を驚かすに足るもの之れなきに非ず、最も得意とするものは經濟問題にして其報導の詳悉迅速なる、其材料の

豊富精確なる、他の新聞の固より企及し得る所に非ず、是れ蓋し三田派の人物が、あらゆる會社銀行の要部を占領し、氣脈を通ずるの便他の新聞より多く且つ大なればなり。

◎國民 新聞社會の革命兒は、疑ひもなく『國民』其最たり、此新聞の初めて生まるゝや、政治の外に文學趣味を加へ、社會、宗教、學術に涉りし問題を加へ、大新聞の乾燥を襲はず、小新聞の野卑に倣はず、折中宜きを得て頗る時好に投ずるものあり、果然其創案は新聞社會に革命を與へ、今や政治専門の新聞すらも、争ふて時文の評論を掲載し、社會一般の觀察に力を用るの傾向となるに至りぬ、而して其文章亦一種の文体を創作して所謂民友社流と稱せられ、孰れの新聞にも多少其文体の波動を及ぼさざるなきが如し。

此の新聞の特色は、紙面全体泰西的臭味ありて、恰も泰西新聞の翻譯新聞なるが如き是れなり、其所謂民友社流なる文体の直譯体なるはいふを待たず、其思想議論亦宛然泰西人の思想議論にして、近頃は更に世界主義なるものを鼓吹し、主筆徳富

蘇峰は此の主義擴張の材料を得んが爲に歐州漫遊を企てたりといへば、蘇峰歸朝の日は、其れ必ず一大刷新を『國民新聞』の上に見んか。

◎讀賣と報知 『讀賣』に紅葉あるは猶ほ『報知』に弦齋あるが如く、彼れは紅葉の小説あるを以て特色とし、此れは弦齋あるを以て特色とす、但し『報知』は原と五大新聞の一にして政治専門の新聞たりしと雖も、近頃其体裁を一變して、繪入新聞となるや、舊時の面影全く消へて、弦齋の小説獨り紙面の光彩となるに至りぬ、『讀賣』は初めより中新聞にして、政治問題に於ては大新聞の壘を摩し、第三面の艶種に於ては小新聞の領域を侵かし、極めて調法の新聞なりと雖も、其讀者の多數は必ず紅葉の小説を目的と爲す。

◎世界之日本 此新聞は陸奧伯の機關と稱せられて最近現出の新聞なり、其論說記事日々唯た現内閣の攻撃を主として甚た見苦しき點ありと雖も、間々警拔の意見なきに非ず、紙面の体裁は『國民』と『朝日』とを模倣したれども、材料杜撰にして報導又精到ならざる短所あり、若し其特色とす可きものはいはゞ、其れ唯だ竹越三又氏の嘲



罵に長せる社説歟。

◎朝日と萬朝 此二新聞は目下必死と爲りての競争中に在り、『朝日』が朝夕二回發行の新聞と爲りしも、蓋し萬朝と競争せんが爲めなりといへり、萬朝は世間之を惡德新聞と稱するに拘らず、近來稍々其紙面を改良して頻りに聲價を揚げんとするもの、如し、此新聞の特色は社説に歐文あると、雜報に探偵的記事あるとに存すと雖も、多數の讀者を得るは決して彼れに在らずして此れに在り、歐文の如きは殆ど虚飾にして、萬朝の讀者には何の興味を與ふるものに非ず、聞くが如くんば萬朝社にては十餘人の探報専門記者あり、一人若し重大と認む可き事件を探ぐり來れば、十餘人皆全力を此の事件の材料蒐集に用ゆ、故に其一たび紙上に現はるゝや、實に驚く可き精到を以て隱を許さ微を闡くの文を成すなりと、其用意甚た盡くせりと謂ふ可し。

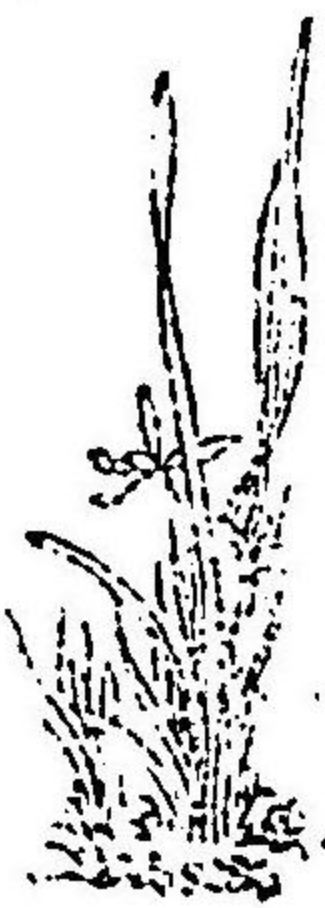
『朝日』は報導の迅速なるに於ては或は『時事』を壓するの勢あり、唯た『時事』の如く精確なるを得ざるのみ、若し夫れ寅彦の手に成る艶種に至つては、他の新聞に於て決して見る可からざる妙味あり、篁村の劇評、浪六、桃水兩氏の小説亦紙面の光彩と爲ると雖も、此の新聞は比較的多數の文學者を有するに拘らず、時文の批評家として一人の適任者を置かざるは惜む可しと爲す。

◎中央と都 『中央』は國民協會の機關にして、『都』は舊革新黨の機關たり、中央の政治的論評觀察は時として奇抜なるものありしと雖も、川崎柴山去つて後は議論稍々衰へたるが如し、此の新聞の特色は講談師の筆記を根氣善く掲載する一事なり、都に至ては特色といふ可きものなし。

◎明治と東京 共に自由黨の機關にして、議論の唯たやかましきのみにて特色といふ可きものあらず。

以上各新聞の長短を概評し終れるを以て、他日を待つて其重なる記者の月旦を試みんとす

(蝶夢仙客)



小閣高栖老一技。閑吟了不爲秋悲。  
寒山常帶斜陽色。新月偏明落葉時。  
煙水極天鴻有影。霜風絕地菊無姿。  
二更短燭三升酒。北斗低橫未易窺。

## ●雪半日

今朝起きいで、雨戸かひやればこはいかに何時の程よりか降り出でけん。見なれし軒頭の山水は皆満目の雪となりて椽にふりくる吹雪は宛然白牡丹花の嵐に散るにも似たり。面目や今日の雪こそ積りたれ。果報や我卜居の草庵膝を容るだに足らずといへども水に臨み山に對せしけさの眺めはいかで金殿玉樓の人にゆづるべき。ふれや雪つもれや雪。

さし向ふ家のならびや雪の河

筏士のはらつくはふて吹雪かな

橋々や雪にふり行く蛇の目傘

一氣呵成則景皆駄句案頭に上りて興かぎりなく。心頻りに動くものからいざさらば雪見に我も轉ぶまでと朝食うこくは降りしきる雪に浮かれいづ。通ひなれたる町筋も今日はいと珍らかに見處多き心地して。俗地俗地と罵りし廣島の何すれぞかくも雅致ある。

つみくづす丸木や雪の河岸つゞき

町々や庭木そびゆる屋根の雪

正面に雪のお城や大通り

城の雪一段高さ木立かな

いづこあてなき足は城郭の内に入らば練兵場に出づ紛々たる吹雪をも物とせず練り行く兵士が姿のけなげさ。去年満州にありし程の事も今更に思はれていと頼もしくるくくと吹雪の中の輪乗りかな

練兵場を過ぎて堀はたつたひに白島の堤に出で雪の橋一つ渡りて二葉山の公園に向ふ。願れば淺野侯の別荘河に沿ふて木立れかしく藪の小蔭にもる、亭も奥ゆかしげに目に入るもの皆畫の如し。

鳥一ひれ雪の林にわたるけり

公園の雪こそおかしけれ。神の御庭のいと清く静かなるに。けさはそちらに逍遙ふ人かげもなく。木の間くぐりの茶店も唯一ツニツばかり煙りを上げたのみ。しんし

んと降りつむ松が枝の雪時にくづれてさうくくと落ち散りたるなほものさびたる境なり。

神の杜雪しんかんとして鳥の聲

一二三雪の鳥井や松の間

神の雪松は皆十丈にあまりけり

雪の杜禰宜が茶をたく朝煙

たまがきやさましくねる雪の松

二葉山の眺望は思はざるにあらねど。高わしたの雪の山道上るにかたくてはたさず。うれより堤に沿ふて河上へ牛田のさとへと向ふ。

白雪の杜を廻れば橋かゝる

左は雪河をへだてて。廣島の市家煙しげく天主閣雪の杜に聳ゆ。右は牛田の田圃雪の山に近くつらなり點々の茅屋雲に幾多の景致を添ふ。河をはさむ兩堤長ふして雪の小舟の漕ぎ出でたる橋のけしきなどいづれ詩中の者ならざらむや。

かさなるや雪の山田の段々に

岐の雪藁屋ばかりのついきかな

ところ／＼雪の屋根見ゆ土手の上

雪の屋根寺とねはしき二つ見ゆ

ひとつ家の柑子はわ／＼に雪つもれり

田圃の雪にころぶもの三たび。再び踵を返して雪の橋を白島の方にわたる。折りしも彼方の堤より乗馬の兵士轡をならべて駆け出でたるさま思はざるの二景を得たり。

遠のりか雪の堤を五騎はかり

白島の市を過ぎ

いかめしき松のかまへや雪の門

一句を案する内新庄の渡に出づ。時既に午時雪はいつしかふりやひで空次第に晴れわたり雪後の山水いと明らかなり。

裏町ややぶのあはひに雪の城

二疊敷ばかり中洲の雪白し

山を背に雪晴れの家みな煙る

河を渡りて新庄の里に廻る。雪どけの道ぬめりて高下駄に足すくみ。車に乗らんも車なく獨り田圃の中に迷ふて田舎の不便を嘆す。風流も此に到て俗物の本性を現はしてけり。

雪どけやあるは葱畑大根畠

雪ばれやむさきもの干す賤が軒

漸く廣島市に出で空腹をかへて車を求め。我草庵に還り見れば。今朝の雪は早や習解けて。金殿玉樓の人にもゆづらじとはこりし景もなかりけり。唯軒頭の山のみ名残の雪真白に我歸りの遅さを待つものに似たり。

雪晴れの山重るや橋の上

(廣島にてたがひ)

日映層巖圖畫色。

風接雜樹管絃聲。



## ●丈夫兒の志

其人の生死、纔に一家の浮沈に問し、郷黨の盛衰と相關せざる者あり、其人の生死、直に郷黨の盛衰に關し、國家の隆替と相關せざる者あり、其人の生死、大に國家の隆替に關し、延きて千歳の風教と相關する者あり、均しく是れ人也、而かも其死生の關係する所同じからざる者如此きは何ぞや、

纔に一家の浮沈に關する者、之を小人と謂ふ、小人は憂ふる所醒醒たる一身一家の饑寒のみ、營々として私を成し、朝以て夕に至る、絶へて公益に企及ばず、其生ざるや蠢々として小虫の如く、其死するや于々として枯草の如きのみ、直に郷黨の盛衰に關する者、之を中人と謂ふ、識未だ必ずしも達せず、材未だ必ずしも高からざるも、大体に通して事理を辨じ、修身齊家の餘力を移して郷黨公共の事に汲々とし、私を損し身を勞するを顧みず、其人の存するや郷黨の秩序整然として、風厚く俗敦く、以て道路橋梁に至るまで、荒廢を憂へず、其人の逝くや里門索寞たり、大に國家の隆替に關する者、之を大人と謂ふ、慨然として治國平天下を以て自ら任じ、居

ては則經世の議を建て出て、は則濟時の策を行ひ、一身の榮辱を顧みずして、而して専ら一國の起落を憂ひ、一家子孫の計を棄て、而して偏に生民の苦樂を念ひ、徳を一代に樹て而して風を百世に遺す、其人の存するや隱として一敵國の如く、上下依頼する所あり、人其の亡きや舉國驚悼、思慕已ます、而して小人始て其私を成し、國是より危うし、嗚呼如斯き者其れ大人なる哉。

夫れ彼の小人たり中人たり大人たる所以の者、之を天に稟くる者なきに非すと雖も亦未だ嘗て人に因らずんばならず、天に稟くる者、其天與を恃みて而して修養を経ざれば、則ち天を賊ふを免れず、則ち已に之を天に稟くる者も亦人に因て之を玉成す、而して後彼の小人たり中人たり大人たる所以の者、以て人に存せざる無きを知る可し、既に人に存す、均しく是れ人也、而かも其人の小人たるを免れずして大人たる能はざる者あるは何ぞや、是れ少年子弟の深く講じ切に思はざる可らざる所の者なり。

方今學制の行はるゝ、亦密なりと謂ふ可し、通邑大都以て荒村窮谷に至るまで、學

校の設あらざる無し、而して公子富兒以て樵童漁姓に至るまで、書を讀み字を識らざる者なし、盛なりと謂ふ可し、而して舉世滔々として小人の蠢々たるを見るのみ、大人を群類に求むるに、亦尠からずや、然らば則ち徒に書を讀み字を識る、亦未だ必ずしも中人たり大人たる所以の道を得ず、既に書を讀み字を識るも亦中人大人たる能はず、則書を抛ち學を廢する、可ならん乎、曰く不可なり、書を讀み學を修めざれば則曷ぞ其志を立ん、既に讀書學問の未だ必ずしも大人たる能はざるを知る、亦讀書學問に非ざれば則大人たるの志を立つ可らざるを見るときは、則其思半に過ぎん。

丈夫兒苟も書を讀み學を修む、豈啻に虫類獸群に異ならんと欲するが爲めのみならんや、身体髮膚の外形、既に彼と同じからず、何ぞ必ずしも書を讀み學を修めて以て自ら苦勞せんや、唯た夫れ人の入たる所以の天職を行はんと欲す、故に讀書學問して天に稟くる所以の者を修養す、人の天職とは何ぞや、修身齊家治國平天下のみ。今人の書を讀み學を修むるは、徒に月給を目的として、何々の學校を終れば月額若干、某々の學科を修むれば年額幾何と打算して、幾多の神腎を文字の間に撰擷

し、既に其目的に達すれば、衣食の末に汲々として、復た鄉黨の公益國家の安危に想及はず、如此して生死す、小虫枯草を擇ぶなし、尙何ぞ修身齊家治國平天下を望まんや、其滔々として小人の類を脱せざるも、亦怪しむに足らず、古人苟も書を讀む、志す所修身齊家治國平天下にあり、治國平天下を以て自ら任す、以て大人たるを失はず、修身齊家を以て自ら期す、亦決して小人に非ず、而して後讀書學問の功事を業に顯はる、其關する所の大ならざらんと欲するも得んや、嗚呼丈夫兒生れて大人たらざれば、讀書學問其れ何の益かあらん。

(西村天四)

## ●秋の旅

◎筑紫紀行

つくしにねはしける人のもとより、此秋思ひたちて、はるけき國々の海はら、名にある所々、名乗をしつゝゆきたりし、昔の跡をも見よ天つみ神のいにしへの愁も、

今はよろこひのぬさとりくくなるにぞ、たひくおほせ事、きこへ給へば、かしこ  
 まりながら、我またしらぬひの、つくしの舟路長月の空は、いかにと打過し、神無  
 月の時雨は、ふりみふらすみ、さだめもやらで、霜月のついたらちに、都を出侍るに、  
 したしき友達誰かかれかと、伏見まで見おくりなどして、立わかるうしろ手、そ  
 いろに物かなしく、さらばとたにいひもはてす、唯ひとり宮ふける船にのり、水の  
 音を枕の下にきくも、旅のならひは、誰もかくこそと、心ぼそし、舟人共の爰は八  
 幡山なりといふに、かしらもたけて、木ふかき山のたすまひ、よそながらふしお  
 がみ此御神の昔はおもふに、船路のかとて、たのもしく、心ゆるひて、いさゝかふ  
 し入ぬ、曉方河風いと寒く、ねられざりければ、

浮舟やたびをしも夜の宮屋形

大阪に着て、筑紫の船にのりうつらんといへば、西の風つよくて、舟出なりがたし  
 とさくに、先河口といふ所に、かりとめの宿ながら、日敷をねくる、あるじ狂句を  
 このみて、夜一酒をしひければ、

船まちをしくれの宿や情ふり

此所のみ居くさらんも、やるかたなき心ちすれば、堺の經王寺の荒たる跡をも見  
 まはしく、五日夕つかた詣て、なにかしの坊にて、

待給へ冬こもりせし法の華

又の日、大阪へかへらんといふに、ある人來て、句をせすは、もどさしといへるに、  
 こと葉は、なくて、

物かたりつもあるや雪の花の友

とて、たちわかれぬ、日くるゝ程に、川崎の丈直といふ人、されたる事共をいへり、  
 我もおもひつゝけて、

なには津にとこほらぬや筆の海

七日には、河内のなにかし、句共を書付、我によしあしをいへ、今より後、その心  
 をえて、又もみすべさといへるに、かきそへてかへしけるついでに、

さむ空に便船してや下り月

八日の暮、船に乗て海にうかへぬ。

大阪をよひに出しはの月の船、曉かけて、霜さやく、蘆屋の浦のいさり火の影はきたくひかし風、西の宮までふく原の、經のみさきの波の聲に、うかひ出たるうろくつや、藻くつにまじる貝つ物、ひろひしあまのことわざの、うきめをすまの磯のまつ、まつとしさかば、かへりこんど、夕葦かまのけふりたに、今はかたみの名どころと、思ふ涙のせき船も、もる人しるき御代なれば、ゆきゝそしけき浦つたひ、あかしのかたは、ほのくゝと、霧立わたる岡の屋のむかしの跡のとはすかたり、さゝもさためす時のまもいろくしかまのかち路より、海路は、いとくはや舟の、追手の風にやはかけて、櫂てはやらひて、うたかたの、あはれ淡路の島津島、

九日、濱邊に、葦くむあまの行かふをみて、

くみはこふあまや葦路の千鳥足  
ういつしつんつ、かいつふり、ぬれぬまもなきあま衣、すそをうすんで、かた

れもひ、鮑によする戀の重荷、つむは船ちのならひなるべし、  
夕暮の程うしさを過るとて、

子の月に見る丑窓の空の月

十日、備前の國を過るに、沖のかたに鳥のあつまり居ければ、

水鳥のよせかまちする浪かしら

黒鴨のなど跡白き波の聲

備後の國、鞆のうらをゆくとて、

追風は寒しや舟のとももの浦

岩木といふ所に、しほやくをみて、

葦かまや霜の煙の二むすひ

十一日、上の關をこゆるに、詞はなくて、

ことの葉の冬かれは何上の關

すくりといふ所に、船かゝりし、獵船をまねきとりて、



時しあれば霜ふり鯛の料理かな  
十二日、北は山遠く、南は海のためて、空につゝきたるやふにて、風なきわたり、  
船はた、一所にゆるるゝ計おはせたり、爰は周防灘とて、むつかしき所なりといふ  
に、舷に出てなから見渡し、宮ふきの霜に、朝日のうつるもおかしく、

霜は白くあかねさす日や周防灘  
鷗の浪にうきたるを見て、

かもめんとおのかしりをやはねのさき  
冬ちるや波の花香といふどころ

十三日、妙法實相のことはりは、大海のことしと、のたまひし事を思ひ出て、  
水鳥もさくや真如の波の聲

はやどものわたりにて、  
風寒しさをはやどもの塩さかひ

下のさきにて

波さえてあまは咳氣やしもの關

あかまの關に、かもめのやふなる鳥のあけるに、昔の事を思ひ出て、

波の底のものかたりせよ都鳥

十四日、葦屋のうらにて、

ふらぬ日も蘆屋にはさそあられ釜

筑前國若松の浦にて、

若松や千世くどよふ友千鳥

(籬屋立圃)



歲暮

襄臣

行く牛の

遅き心の

身にも似ず

年齢のみ世には

後れざりけり

叢書 學五 秋聲白露終

明治三十一年十二月廿一日  
明治三十一年十二月廿一日

印刷行

定價金參拾錢

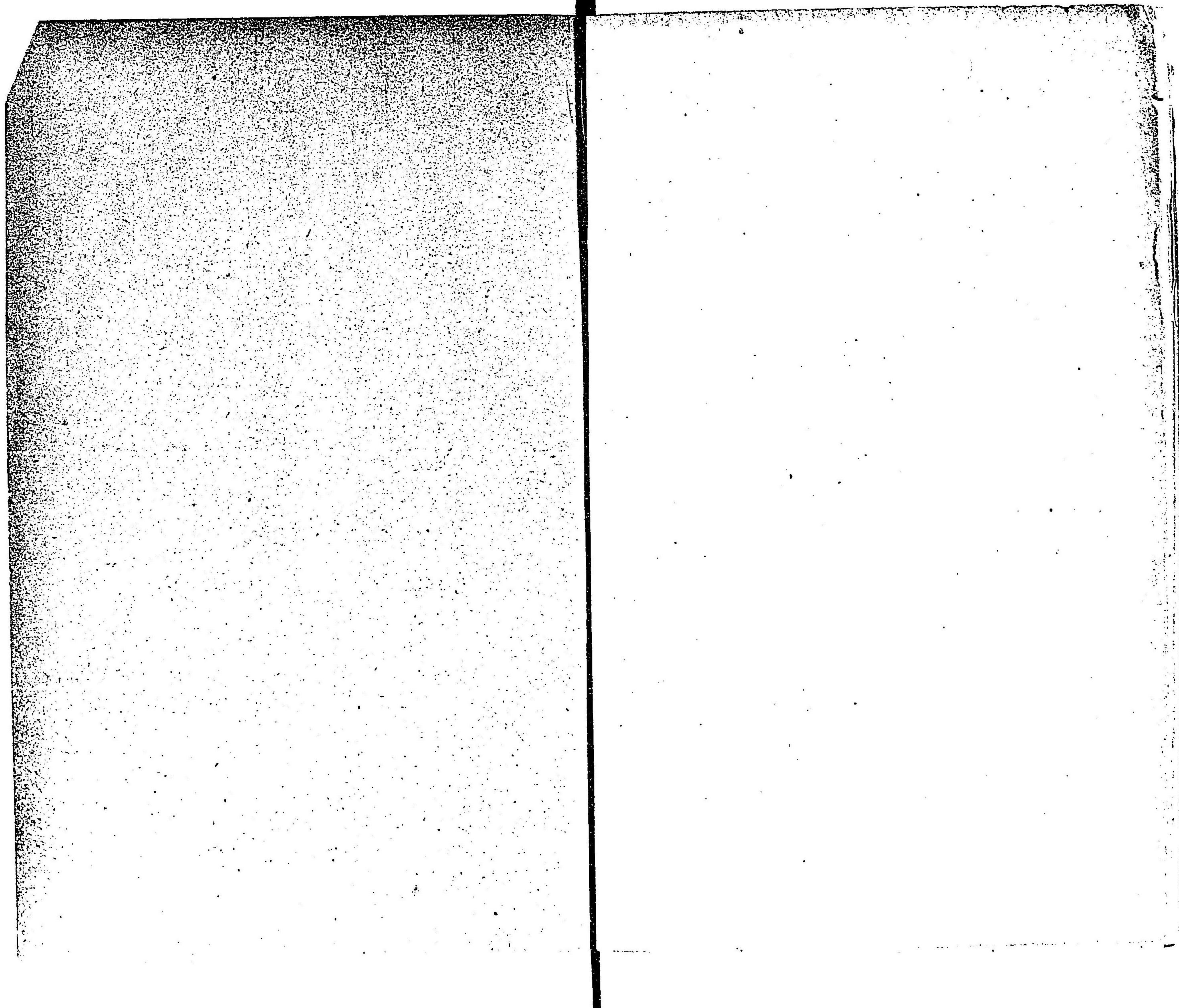
編輯兼發行人 鹽澤梅  
東京市麴町區三番町八十五番地

印刷人 松井七之助  
東京市神田區錦町一丁目十二番地

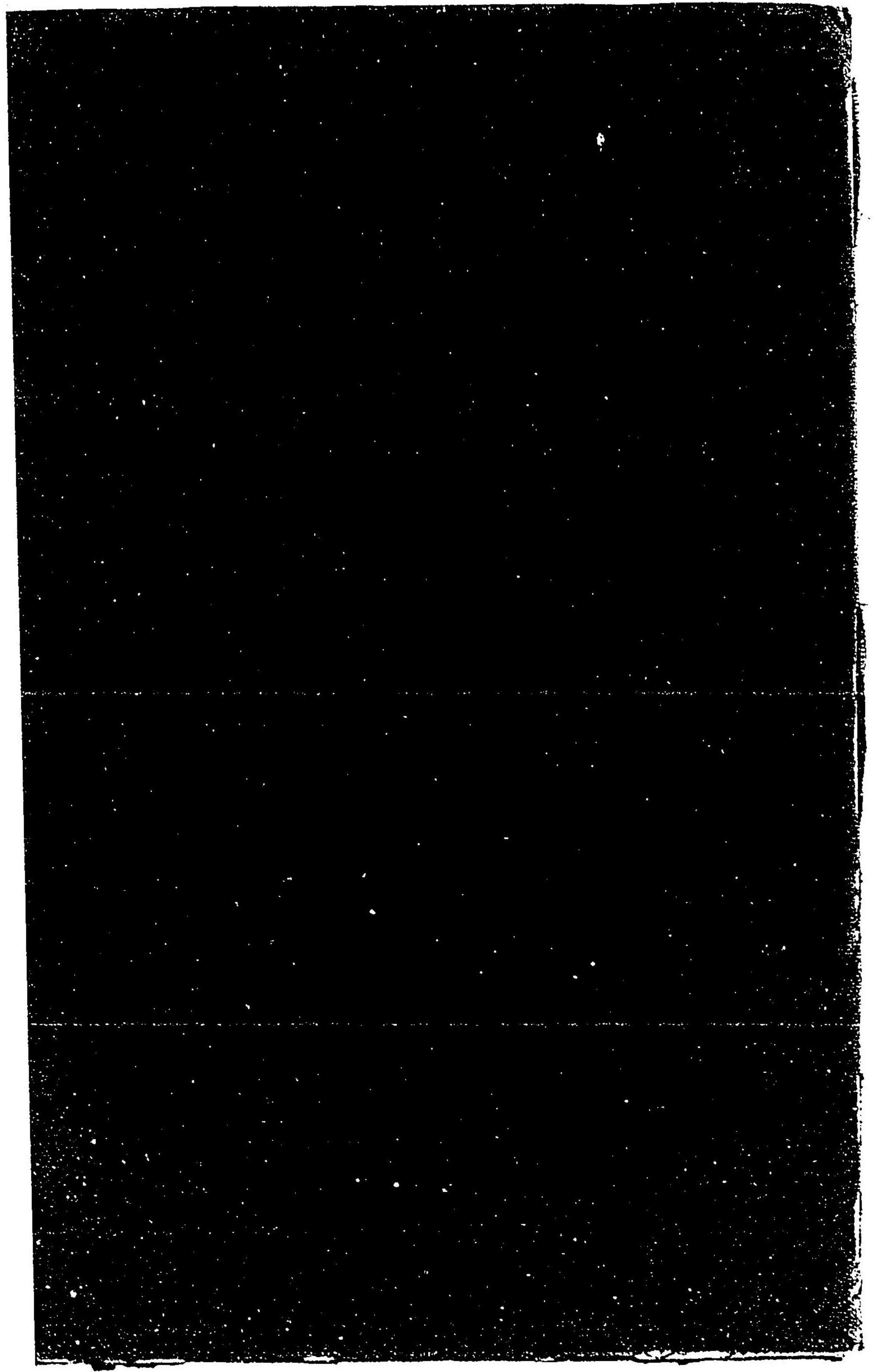
印刷所 晚翠舎印刷所  
全所

發兌元 研學會  
東京市麴町區三番町八十五番地

版權所有



68  
63



68  
493

205181-000-6

68-493

秋声白露

三宅 雪嶺/等述

M31

EDV-0203



